

産業建設教育常任委員長報告

令和7年12月17日

産業建設教育常任委員会では、令和7年11月5日から7日にかけて、広島県尾道市、香川県直島町、および広島県福山市において行政視察を実施いたしましたので、その概要を報告いたします。今回の視察は、あわら市の産業・観光・まちづくり、そして教育施策への応用を目的とし、特に文化・芸術を軸とした地域ブランディングの可能性を探る視点で行われました。

まず、広島県尾道市では、サイクリングを通じた体験型観光のあり方と、商店街・観光拠点の再生について視察しました。尾道市では、「しまなみサイクル」としての統一ブランド戦略が確立されており、民間が観光を牽引し行政は制度整備やインフラ整備に特化するなど、役割分担が機能的に行われていました。サイクリング初心者にも優しい受入環境として、「ブルーライン」の路上表示や休憩・交流の場となる「サイクルオアシス」（市内に174箇所）が整備されていました。まちづくりにおいては、「古いものを残しながら新しい価値を足す」という明確な意思が感じられ、古民家を再生した小規模店舗が町全体の統一感を保ちつつ、アート志向の旅人を惹きつけていました。あわら市においては、北瀬湖周辺など、温泉・自然・農業・スポーツを組み合わせた体験型観光ルートの整備や、観光を行政任せにせず地域・事業者が一体で推進する、民間主体・行政支援型の観光推進組織（DMO的枠組み）の検討が必要です。

次に、香川県直島町では、アートツーリズムと住民生活との共存のあり方を視察しました。アートによる地域振興は数十年間単位の積み重ねで形成されたものであり、観光を牽引するのは民間であり、町（行政）は説明・調整役に徹している点が印象的でした。町が観光推進よりも「暮らしを守る交通と景観」を重視しており、町営バスを「住民の足」として運行し料金を据え置く姿勢に、行政の哲学が感じられました。島全体が「産業」「文教」「アート」の3エリアに整理され、生活と観光が分離しつつ共存し、直島ホールのように公共施設もアート作品のように構成され、芸術が「生活と共にある存在」となっていることを実感しました。あわら市への活用としては、行政が“調整者”として機能する直島の在り

方を参考に、地域の資源を活かした回遊性ある文化・芸術エリア形成を検討し、地域の日常にアートを溶け込ませていくことが、まちの豊かさや持続性を高める鍵となると感じました。

最後に、広島県福山市では、イェナプラン教育を取り入れた学校運営と地域との協働体制を視察しました。福山市の教育は「教える」より「共に学ぶ」という理念に基づき、異年齢集団や対話を重視するサークル活動などを通して、子どもたちが「自分の学びを自分で作る力」を育てていました。教職員約2,000人が月に一度一斉研修を行うなど、教員育成が「まちの教育の柱」と位置づけられており、不登校児童への支援として、メタバースによる仮想空間での学びや地域フリースクールの活用など、多様な学びの選択肢が整えられていました。地域学校協議会は、単なる「報告」ではなく、地域が学校運営の「教育パートナー」として日常的に関わる協働体制が機能していました。あわら市においても、この協働体制への発展と、誰一人取り残さない学びを実現するための多様な選択肢の構築が急務であると考えます。

今回の行政視察では、尾道市の体験型観光の発想、直島町の暮らしと芸術の融合、福山市の子どもが主役の教育文化など、地域の魅力を最大限に引き出し、住民満足度を高める先進的な取り組みを多く学びました。これらの知見を活かし、あわら市においても、観光・教育・まちづくりを横断的に結びつける施策について、深く議論していく必要があると考えます。

以上、産業建設教育常任委員会の行政視察の報告といたします。